

## <座談会の記録>文献、データベース、出版

著者	宇野 隆夫, クレインス フレデリック, 白幡 洋三郎, 末木 文美士, 早川 聞多, フィスター パトリア, ブリーン ジョン, 松田 利彦, 光田 和伸
雑誌名	日文研
巻	49
ページ	162-204
発行年	2012-09-28
特集号タイトル	創立二十五周年記念特別号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00004150">http://doi.org/10.15055/00004150</a>

## 文献、データベース、出版

二〇一一年五月一九日

パネリスト

宇野 隆夫

フレデリック・クレインス

白幡洋三郎

末木文美士

早川 聞多

パトリシア・フィスター

ジョン・グリーン

光田 和伸

司会

松田 利彦

**瀧井** お待たせいたしました。五月の木曜セミナーをこれから開催したいと思います。

これまで三回にわたって行ってきた日文研二五年史を振り返る特別企画の座談会ですけれども、今月はその第四回目ということで、文献、データベース、出版事業というところを取り上げて、これまでの日文研の実績、そして課題、展望というものを自由に話し合っていたきたい

と思います。

それでは早速、本日の司会の松田先生のほうにマイクを渡したいと思います。よろしくお願  
いします。

**松田** 皆様、お忙しいところ、きょうはおいでくださりありがとうございます。

二五年史の特別企画である座談会の最終回ということで、今回は、文献、データベース、出版、一言で言えば情報の蓄積と発信にかかわるような話をしたいと思っ  
ているわけです。

どの事業も日文研の事業の柱になっているものであり、また日文研の存在理由の大きな一つでもあろうと思います。ざっと現状を言えば、文献については、今、大体四七万冊ぐらいが図書館に収められており、データベースは五二件が作られ、出版も末木先生がご苦勞されておりますが、毎年一〇点ほどが欠かさず出されているという状況であります。

このように蓄積が進むと同時に、今は二五年ということを離れても少し節目にかかっているのかなという気も個人的にはしています。例えば、第二図書館が昨年でき上がったわけですが、日文研で図書館の建物が増設されたのは、歴史的に言うると一五年ぶりということになるらしいです。また、早川先生などがご尽力くださっています。出版の電子化などといった新しい問題も生じています。

こういったところを考えながら、きょうはそもそもこういった文献、データベース、出版の方針がどういうふうに出てきたのかという昔語りから、今後どういうことに我々が立ち向かっていかなければいけないかという未来の課題まで、ざっくばらんに話を進めていきたいと思っております。

最初に受付のところ  
で資料をいただきました。昭和六二年六月二九日付の「研究資料委員会

の開催について」という、こういうものがあつたんだなあというのを私も初めて見たのですが、これは白幡先生がご用意くださったのですか。

白幡 はい。

松田 これを見ると、どうやら今の文献収集の基本方針、つまり外書、基本、専門、目録という形で分かれている基本方針のでき上がりがわかるような感じですね。この資料の解説も含めて、そこらあたりのお話を白幡先生からお願いしたいと思います。

白幡 お手元に配りましたが、これは資料の「改ざん」でありまして、B5で配付されたものです。B5をA4に拡大しています。かつては事務資料はB5を基準にして、二枚分をB4にしたりしていました。こういう形式も変わったし、それから、きょうなんかの議論ではペーパーレスが主張されています。二五年たつと、本当にいろんなものが変わると思っています。

さて、用意した資料ですが、一番最初の基本方針のところにはおもしろいテーマが書かれています。今日また検討し直さなければならぬテーマも多々あるかなと思って、用意してみました。

お手元の資料の最初のページは、創立から一ヶ月ぐらい後に、研究資料委員会を開いた時のものです。これより以前、創設の一年前に何を集めるかは、概要要求といいますが、予算要求をしないといけないので、創設準備室ではそれをやっていたんですね。

その方針に基づいて、二ページ目に「研究資料収集計画」というのが出ています。これは亡くなった園田さんが作ったものです。まず最初、「最も基本的な収集図書は、外国語で書かれた日本研究書（以下外書と略す）」と書かれていて、既にもう発足当初からこの方針があつたんですね。いつから「外書」という用語を使い始めたのか、この機会にふりかえってみたいと

思っていたのですけど、この前の年にもう「外書」はあらわれています。これは園田さんが言出したものです。そして、「ANOの会」でこの言葉を聞いた私は、まだなじみがないので、自分のメモには「外日書」かな(?)と書いています。結局今でも「外書」という言葉が使われている。この資料は、「外書」が委員会で提案されて、その後ずっと使われるようになった最初の公式文書ですね。

しかし、既に最初のところにもう問題点があります。二枚目に書誌情報だけではないかにも貧弱なので「外書に関連するなんらかの情報を追加する」というふうに書いてあるんです。「研究資料収集計画」の中に。問題点として、みんなで手分けしてやろうということになったので、真剣にやると「個々の教官の負担が重くなり過ぎないか」というぐあいに、園田氏は考えているんですね。

資料収集に関して、理想論はいくらでも言えるけれども、やっぱり基本的には一方で予算というお金のしぼりと、他方では我々の能力というか、収集全体への目くぼりと収集したものをちゃんと、整頓、分類するなど、能力的・時間的な余裕をもとにした資料整理作業がちゃんとできなかったらいけないということでしょう。もう既に第一回の資料委員会から、こういう問題の検討に入っていたんです。

今も、どの委員会でも、いろんな提案が出てきますけれども、「教官の負担が重くなり過ぎないか」は、わりに日文研では考えて気を遣うテーマで、つまり、それぞれの人たちの研究の時間をいかにより多く確保するか、業務割当で阻害されないようにするかが、資料収集の中でも考えられていたということです。

三枚目、これは亡くなった園田氏が手書きで委員会に提案した図ですが、右上に「外書（外

国人のみた日本」というのがありまして、「外書」を中心に、例えばこれを収録したようなマイクロフィルムなどを集めることや、左下のほうにある「海外における映像資料」とか、そういうものも集めようということを計画されていました。

ちょっと脱線しますが、「第一回研究資料委員会議事概要」は、今と違って簡単な議事概要。最近、委員会の議事要旨というのがものすごく詳しくなっていて、要旨を読むのも大変で、見終わって大事な点は何だったかなと忘れてしまうような長文の「要旨」があるんですが、概要というものは概要でなければと反省させられます。

で、このとき、おもしろいのは、七月八日にやった委員会の記録ですが、研究部はドナルド・キーン教授、あと助教授だけなんです。教員メンバーは四人しかいませんでした。そして管理部からは部長、課長二人、係長、そういう方が出ていました。

そのとき議論をやりました結果、決められたのが資料室。まだ集めた資料を置く場所がなかった。資料室の開室。それから、図書館以外に、とにかく自前の建物がないので研究室も含めた建物の基本設計について、これも資料委員会として検討していました。それから三番目「臨時事業資料収集計画」、これは予算がついてきますから、どんな本を買えばいいかというのを緊急に提案しなければならないということで、そういうことも含めて。それから、そのときに一〇ヶ年計画というのを立てようということで、「長期収集計画について」というのが運用されました。上垣外さん、園田さんの配付資料をもとに議論されました。

このとき決まったのが、その後、一〇年続く基本方針ですが、「イ、基本的な参考図書類及び全集類を収集する」、これを「基本図書」と名付ける発想だったんですね。それから「ロ、外国語で書かれた日本研究書を柱として収集する」という外書収集方針もこのときに決まっ

おります。

で、「その他」の項目があります。この「その他」では、例えば我々は新たに発足した共同利用研で、国立の研究組織だけれど、実は国立大学の図書館を使えなくなったんです。国立大学の図書館で組織している全国協議会にメンバーとして認めてもらわないと利用できないのです。私も国立大学の出身で同じ国立の日文研に移っただけだと思っただけなのですが、元いた京大の資料が使えなくなりました。非常に不便になりました、それで資料課に必要な交渉をしてもらって、国立大学の教員と同じような図書相互利用ができるようになりました。国立大学図書館協議会でしたかに申し入れをして、一、二年後に、図書利用の便宜を図ってもらえるようになったと記憶しています。

設立初期は所蔵研究資料などほとんど何もなくて、そこで資料収集に関して立てるべき方針が多岐にわたっていました。それで、何枚目ですか、「収集文献の全体」という図がありますけれども、この図に従って、外書やその他必要な文献の収集を始めていったということです。

ちょっとここでおもしろいのは、左の隅の四角に書いてある「個人研究に必要とされる研究書」というのが「一人五〇万円」と下に書いてあります。「一人五〇万円程度を限度として自由を選ぶ」と。この五〇万円が当初の「個人研究費」でした。個人研究といっても使えるのは図書購入費に限られていて、個人人が持っている専門性に従って、その専門分野の本については五〇万円を限度として選びなさいと。それが、基本的には本人の研究費であるということになっておりました。

最後のページですが、「メイン・コレクションの構造」として、当初立てられた方針の骨格が書かれています。この方針に基づいて少なくとも一〇年ぐらいで、日文研らしいコレクション

ンの形を作りたいということで、まず一番目は外国語で書かれた日本研究書、外書を収集すると。それから二番、三番、四番。例えば四番では「映像資料をどのように位置づけるか」ということで、私は、その映像資料収集の方針立案任務に当たることになっており、この日報告しろというふうに決められていたんです。(この日はまだ「外像」という言葉は出てきていません。) 外書のほかに、日文研では文字中心の図書以外の資料をぜひ、ほかの研究機関に先駆けて重点的に収集していこうというふうに決まりました。今でも写真、地図、ポスター、絵はがき等、あるいは動画の映画、ビデオというような映像資料を重点的に集めるという方針がありますけれども、それは最初のときから議論されていたものでした。

なぜそういうことを考えたかという点、他の国立大学、歴史ある、由緒ある国立大学というのは何十年、京都大学や東京大学に至っては一〇〇年にも及ぶ収集の歴史を持っているわけですね。そういうところに比べて、ゼロから本を集めるということになります。京都大学、東京大学にあるような本を集めても二番煎じにすぎない。研究に必要な借りに行けばいいじゃないかと。わざわざそういうものを、あれば便利だからといって図書購入の予算を使うのはよくない。よそがやっていない収集をやってユニークなコレクションをどうやってつくりだすのか、いろいろ考えた末に出てきた一つが外書でした。そしてもう一つが映像資料です。大体、地図や写真というものを図書資料として整頓しながら収集していくのがなかった。結局この日議論した(園田氏が立てた)方針をもとに、外書、映像資料を中心に収集をしていくことになったわけですね。映像資料の収集が提案されるのにあわせて、情報機器といいますが、コンピュータ関連の設備も充実させなければいけないというのが当然出てきて、初期の方針になったわけですね。



それが、ほぼこの二五年間、おおむね堅持されてきました。当初も考えていたように、外書だけかという思いは、今また出てきているようですし、一体我々はほかに何か収集すべき大事な資料はないのかと問われていると思います。

それから、映像・画像資料というのも、媒体がどんどん変わっていきますよね。かつては、写真、絵はがき、ポスターというようなものは紙媒体だった。それにビデオや映画というフィルムや磁気テープが入ってきた。今や本当にいろんな多様なデータ形式がある、媒体があるわけですが、それをどう研究に生かすか、どう集めるか、保存するかが議論されていない。

この初期の資料を見ていただいて、ゼロから出発するときにはどんなふうな議論がなされたか、その雰囲気を知ってもらえたらいいかなと思ってこれを出しました。以上です。

**松田** ありがとうございます。

私が一二年ほど前に赴任したとき、ちょうど研究資料委員会の委員長が園田先生で、たしかにこういふ話を聞いたなあというのを記憶の底から思い出していたところです。

この資料、昭和六二年、一九八八年ですけれども、この時点ではまだ、図書館はおろか日文研の建物もまだできていないわけですね。図書館ができて稼働し始めるのは、このさらに二年以上先のことになるんですけれども、この時点では計画を立てておいて、予算がつくということが確約されていたのですか。

**白幡** いや、大きな方針はあるけれども予算が確約されているわけではなく、毎年概算要求を出して、そのための説明用に作文をする作業の繰り返しでしたね。

それから、収蔵施設の規模を確定するには、一体どういう資料が研究のために必要で、その全体はどれぐらいの量になるのかという計算が必要でした。今回の外書館についても同じよう

にやられたと思うんですけれど。

**松田** ありがとうございます。

そういう形で始まった図書収集ですけども、外書あるいはそれ以外にも重要なコレクションというのはいくつかあるわけです。こういうことにかかわった方々、ここにはたくさんいらっしゃいます。早川先生とか、そこらあたりで。

**早川** 今、白幡さんが言われたように、外書というのは初めから出てきていて、それを中心にしていくと決まっています。京都外大がそれに近いことをやっていたと思いますが、それを越そうということではじめました。

そして、それだけではということ、映像、画像のデータを集めては、という案が出ました。大体ほかの図書館、大学なんかは、本、テキストの資料が中心で、これはおそらくデータベース化されていくだろう。そのときに日文研としての特色を出すのに、外書の他に映像資料、例えば古地図、古写真、それに図絵類なんかを集めてはどうか。それもハイアートのなイメージ、美術館、博物館が扱うようなイメージじゃなくて、名所図会の中の挿絵とか、ポスター、絵はがき、そういう生活風俗に関係するイメージを大きな柱にしてはどうかということ、話し合われました。

ただ、今だと信じられないかもしれないかもしれませんが、一枚の画像をデジタル化するのに、一枚のフロッピーディスクを用いても、ようやく一メガのデータしかとれません。今ではものすごい精密度の高い、データが容易にとれますけれども。

そういう画像をコンピュータで扱うのが非常に難しい頃に、この世界は日進月歩するだろうと予想して、本館ができるときに、情報課というものは必ず設けようと考えていました。その

ときに参考にしたのが民博さんですね。杉田先生には何回も来ていただきました。

ついでに言いますと、その当時は文字データをコンピュータで扱う場合でも、漢字をどう扱うかということが重要な問題だった時期で、日本語ワードプロセッサがまだ発達してない時期で、一文字一文字打ち込んでいた時代です。画像データに関してはどこともまだ手をつけていない時期だったと思います。

その頃、白幡さんとよく話したのが、ある時間軸で切ったら、その時代に関係するいろんな分野の画像が出て来てその時代が大まかに見られれば面白いなあと言ったのを、非常によく覚えています。

今、企画室で「KATSURA II」でやっている地図の上にそういう画像データを載せようというのは、実はその発想の進歩したものです。文字データと違って画像データで日本研究に新しい発想を生み出すようなデータベースを作りたいというのが、初期の日文研においてみんなですて楽しんでいた空想です。

そういう意味では、初期の夢はだいぶ実現可能になってきたかなというのが、今のところの感想です。

**松田** 文献及びデータベースも含めて、コレクションの話になっておりますので、コレクション関係に強そうな方のご発言をお願いしたいと思います。光田先生も文庫の創設にかかわられたと思います。

**光田** 私が日文研へ来ましたのが一九九五年、平成で言うと七年です。このとき、第一回の研究資料委員会が一九八七年ですから、八年たっているわけですが、私はずっと、この昭和六二年の秋、早川さんがちょうど着任なさった前後から、共同研究会が始まりました、その第一

回、ドナルド・キーン先生と中西進先生が中心になった「日本文学と『私』」というテーマの研究会に出ておりましたので、初期のことは雰囲気としては知っています。でも、二ヶ月に一遍ぐらい来るだけでしたから、詳しくその裏の舞台まで知っていたわけではないんですが。

着任して非常に驚いたのは、どんどん資料が増えていくということでしたね。ここは国立の機関でしたから、資料というものにかげられるお金は横並びで大体決まっているわけなんです。しかし特例があって、たしかあれは創立されてから一〇年間は、何倍でしたか、普通の基準の五倍とか一〇倍の資料あての予算がおりてくるんだそうです。そうですか、一億ですか。年間一億だそうです。ですから、ちょっと国立大学では想像もつかないような資料が入ってくるわけですね。

あまり内輪のことを言っではいけないのですが、私は京都大学で助手をしていたので、文学部の国文学研究室の年間資料購入予算というものを知っています。一億に比べるとその一％ぐらいです、多くて二％。ですから、何を買おうなんていうことは、もう相談する余地もないという、そういうところでしたので、こちらへ来て本当に驚きました。

私の関係で言いますと、杉本秀太郎さんという、この名誉教授に今なっというらっしゃる方がいらして、その方が、ある資料を買ってくれと資料課のほうに要望して、とてもそんなもの買ってくれるわけがないと心中では思いながら、買ってくれと要望したら、買ってくれた。それがたしか一五〇〇万円。何かと言いますと、それは『平安人物志』という、江戸時代の近世の後期に京都のまちに住んでいた文化人、名士のいわば人物録「Who's Who」があるんですが、そこに載っている人の書いた短冊です。漢詩、和歌、俳句及び絵画。『平安人物志』に載っている、京都のまちに住んでいた一流の文化人が書いた短冊に限定して収集したものです。

これは、思文閣におられた小笹喜三さんという方が生涯をかけて収集なさったもので、何がおもしろいかというと、ジャンルを超えていろんな人が交際しているわけですが、その交際の手段として短冊があった。俳句を専門にしない人も俳句を書く。和歌を専門にしない人も和歌を書く。もちろん俳人も歌人も絵を描く。そういう交流の証拠として、異文化交流の証拠として短冊というものがある。

もしかすると、日本中で日文研に一点しかないものとして貴重なものに、例えば頼山陽という漢詩人が書いた和歌があります。これ、皆さんはそんなにびっくりしないかも知れませんが、漢詩人は和歌を書かない、日本の仮名文字というものを認めない。それから、日本の神社へ参拝しない。鬼神を避けるというのは儒学の問題ですから、儒者は日本の神社へ参拝しない。お正月にも行かない。初詣しない。徹底しています。ただ、例外があって、北野天満宮とか、ああいう天神様はいいんだそうです。あれは歴史上の人物であったことが確かであるし、何しろ漢文学の神様ですから。中国の閔帝廟のようなものだと思います。北野天満宮には行ってもいいんですが、それ以外の神社には参拝しないんです。

ところが、頼山陽の書いた和歌というのが、実は伊勢神宮へ行って詠んだ和歌なんです。とんでもないことなんです。これ、調べてみますと、お母さんがどうしても伊勢神宮へ行きたいから連れていけと言われて、お母さんの言うことには従ってついて行って、仕方なくかどうか知りませんが、そこで詠んだ和歌が短冊になっています。大変なことなんですよね。それ一つだけで、日本の儒者の精神構造みたいなものが、外に対しては非常に固いけれど、家庭内の女性には弱いという精神構造が見えて、日本はやっぱり女の国だなあとという感じが、この短冊一つで出ている。中国とはそのあたり違うのではないかと思いますけど。その短冊一枚でエッセ

イとか論文が書けるかもしれないという大変貴重なものなんです。

膨大なものですが、私も着任してすぐその整理に取りかかりました。杉本先生は私とほぼ入れ替わりでおやめになったので、私とその整理の中心に立たざるを得なくなりまして、今はきちんと整理されています。

そうですね、あれ、私がかんたんそれで論文を書いたほうがよかったですけど、今、私はちょっとほかのほうへ専門を移していますので、手つかずのままになっています。今、お話ししたことを含めて、今、聞いていらっしゃる方、どうぞ、もうこのテーマをお譲りしますので、そういうテーマが一〇〇でも二〇〇でも発掘できる資料なんです。日文研の書庫の奥深くにきれいに整理されて眠っています。どうぞ、利用してください。よろしく。

それから、コレクションについても一つ申し上げますと、宗田文庫という文庫があります。これは、宗田一先生という、この方も平成八年、一九九六年、ですから私が着任した翌年に亡くなった方なんです、この方は日本の民間医療、ちゃんとした専門の医師による治療というよりは、民間による医療の歴史を研究なさった方で、当然そんな資料は全部自前で購入なさって、自分の学問をつくっていかれた方です。日文研の共同研究会のメンバーとして山田慶兒先生のところで随分ご活躍いただいたのですが、次から次へといういろいろ聞いたこともないような資料を持っていらして、それをもとにお話になるので、皆さんが驚いていたようなんです。

その宗田先生がお亡くなりになったときに、そのお持ちの資料を一括して日文研で譲り受けられないかという話が出てきました。ご遺族にお願いすると、寄贈しましょうということだったのでそうです。

これも私が、一九九七年、平成九年から宗田文庫目録編集委員会というのが立ち上がりまして、その委員長になってしまいました。本来は早川さんがなるべきだったんでしよう、なぜか私のほうにお鉢が回ってきまして、それが足かけ五年かかって、仮目録一冊を含めて全部で四冊。これは、日文研でいろんな、コレクションの目録の労作がその後に出ておりますが、その中でも最大でしょうね、仮目録を含めて四分冊というのは。

仮目録のときの前書きというのを私、書いているので、それをちょっと少し読ませてもらいます。これは宗田文庫仮目録、一九九八年に出版されたものです。

宗田文庫と名づけられることになった資料類がセンターに届けられたとき、我々は感動するとともに、呆然とするほかほかだった。その収集は、質において高く、量において膨大であったが、同時に従来 of 考えではこれをどのように整理し、分類し、利用に供すればよいか戸惑うものも少なくなかった。

平成九年の夏に発足した宗田文庫目録編集委員会は、とりあえず書物の形をなしているもの及びこれに準ずるもので、整理、分類しやすいものをまず仮目録として早急に編集し、一日も早い利用に供することを目標とした。考え方によっては、あるいはそうでないものの中に宗田一氏の収集の神髄があるときさえ言えるかもしれないけれども、それにはまだ長い時間が必要である。

結果として、本になっていない一枚ものはおろか、葉の包み紙の包み方の変遷を示す資料とか、外科手術用の江戸時代のメスであるとか、葉箱であるとか、これはほとんど博物館が扱うもので、図書館にはなじまないのではないかとというようなものもたくさんありました。それをどういうふうに目録にするかということが本当に随分かかって、最終的に二〇〇二年の三月、

図版篇の二冊、図版篇のCD-ROMつきですから、二冊をもって終わったわけですね。

ただ、図版はカラーでとったのですが、出版の費用ということがあって、その頃に勃興してきたCD-ROMによれば費用が半分どころか、もう何分の一であるというので、私はちょっと委員長として迷ったんですが、押し切られる形でCD-ROMでいでしょうという決断をした記憶があります。でも、それはその当時、随分あちこちから恨まれました。「全世界へ送るのに、CD-ROMで図版を見ることが出来る国が今どれくらいあるのかわかっていますか」。一部の文明化した国だけでそういうことを決めるのは、やっぱりよくないのではないかと思います。今はそういうことは、たぶん、世界のかなりの国でもうなくなっているんですけど、私としてはちょっと悔いの残る決断で忘れがたい思い出です。それも今となっては、もう昔話になるのかもしれないけれども。

以上、簡単に申し上げます。

**松田** ありがとうございます。私もよく存じなかった宗田文庫の由来について、とてもよくわかりました。

もう一つ、コレクション通の方として、クレインス先生にお願いしたいのですが、今でも外書の充実にはクレインス先生に大変尽力して頂いております。ちょっとお話しただければ。  
**クレインス** まず、私と日文研との出会いなんです、私の場合はまだベルギー、ルーバン大学にいたときに、*Japan Review*を見たのが初めての日文研との出会いでした。

一回目や二回目の座談会でも日文研のイメージが当初かなり悪かったという話があるらしく出ていたんですけど、私の場合は*Japan Review*が最初の出合いで、日文研はあこがれの的でし



た。どちらかというところ、日本学の総本山みたいな、そういうふうなイメージでした。私は、まだ若かったし、日本学科にいましたので、これはもう最高の研究機関であると思っていました。

その次の出会いというのは、日本に来てから京都大学で研究しているときで、図書館でした。その当時は蘭学の研究をしていて、日文研の図書館に、例えば蘭学者たちが参考にしたブルーハーフェの医学書のオランダ語版のような珍しい本がありました。これはおそらく私の恩師の松田清先生が日文研に入られたと思います。彼は日文研で客員教員を務められていたので、たくさんの蘭学資料が日文研にあります。日本のほかのところにはないものが日文研にありますので、京都大学にいたときに何度も日文研に足を運んで、ここで調査をしていました。

そのため、私の日文研のイメージというのは専ら図書館のイメージです。二回目の座談会では、共同研究会によって日文研と出会ったという人もわりあい多かったのですが、共同研究というところと一九九八年にルーバン大学で国際シンポジウムをやったときに、ルーバン大学側として参加したのが初めての共同研究的な出会いだったんですが、既にその前から図書館をよく利用していました。

そのために、日文研イコール図書館というのが非常に強いイメージで、今でもOPACで何か探すときに、例えば京都大学だったら京都大学附属図書館に本があるとか、あるいは東南アジアセンター図書室に本があるんですね。日文研の場合は、「国際日本文化研究センター」しか出てきません。「図書館」ということばは出てこないんですね。つまり、日文研イコール図書館という、OPACで調べるとそうなりますね。

八年前ですが、助手として採用されて、ここで研究するようになってからは、最初は蘭学をやっていたんですが、わりと早く外書の存在を知りました。私はベルギーから日本に来て、日文研の図書館に、オランダ人をはじめヨーロッパ人が日本に来て、日本について書いたものがたくさんあって、懐かしくなって、そういう本ばかり読むようになり、だんだんと私の研究テーマも外書へシフトしてしまっています。公式的には医学史、科学史なんですけど、ほとんど九〇％は外書の研究を今やっています。その傍らで収集も行っています。結局、研究すると、これも見たい、あれも見たい、これもない、あれもない。で、その度に古本屋さんで調べたりして、購入願いを出したりしています。

ここで一つわかったのは、まず日文研ほど外書がたくさん集まっている図書館はほかにないことです。ただ、その一方で、世界にある重要な外書の中で、日文研はまだ半分も持っていないですね。まだまだ多くの宝物があちこちに隠れていて、この座談会の最初に掲げられた外書を全部集める、あるいは網羅的に集めるという方針は、これからもたぶん長く続くと思います。

きょう話したいのは、私が外書を使っての将来展望について感じたことなんですけど、まず日文研の図書館というのはちょっと特殊な図書館なんです。普通の大学の図書館とかなり違うと思います。普通の大学の図書館というのは、いろいろな分野のいろいろな学問のための本をできるだけ集めて、いろいろな人が利用できるんですけど、日文研は日本関係の図書しか所蔵していません。これは外書だけではなくて、日本語で書かれた日本についての本も含むと思いますが、そういう非常に特定の分野のいわゆる専門図書館なんです。だから、日文研の図書館について、ほかの人に話をするとき、「私たち、外書を集めているんですよ」と、一応日本関係の図書をできるだけ網羅的に集めようとしているといったところで、大体の反応は「あつ、

「そうですか」という、あまりわかってもらえないことが多いんです。

これは、一般の人から見ると、そんなに重要じゃないような気が私します。ただし、日文研の図書館は一般の人のために建てられたわけではなくて、あくまでも特定の利用者のため、つまり日本学の研究者のために建てられた専門図書館ですので、そこから日文研の図書館の将来展望を考えなければならぬと思います。

そこで二点ですが、一つは知識の保管です。いろいろな資料を集めて保管していく、将来のために残していくということなのですが、もう一つは利用者のため、つまり日本学研究者のための情報の伝達、知識の伝達、これも一つ非常に重要なことです。

今、白幡先生が出されたずっと前の収集計画の中に、既にその部分について、園田先生が十分認識されているんですね。どこだったかな、「情報を付加する」と書いてあるんですね。一番に「外書に関連するなんらかの情報を付加する」と。ここで問題点は「教官の負担が重くなり過ぎないか」ということで、確かにそうですね。非常に難しいところで、私もずっと悩んでいるところです。もちろん今はデータベース化が進んで、これも一つの重要な役割で、世界のどこでも日本関係図書を閲覧できますし、かなり進んでいるんです。ただ、それ以上に何か、付加価値をつけることは必要ではないかと私は思います。

そこで、きょうお話をすることをちょっと考えた時に、ふと思ったのは、図書館と共同研究の相乗効果なんです。実は今、オランダのライデン大学から、フィアレー先生がいらっちゃっていて、オランダ商館日記をはじめ、オランダの文書の権威の先生なんです。これはチャンスと思って、今、週一回、図書館で勉強会を開いています。フィアレー先生と、あと、今私の外書プロジェクトで来て頂いている益満さんと一緒に、三人でいろいろな外書とか、文

書をどんどん見て、いろいろな質問をぶついたり、調べたりしているところなんです。

とてもおもしろいことばかりが出てきます。特に日本の歴史について、あまり日本の資料に出てこないものを、外国人が見て記録しているものなど、いろいろ出てきているので、今回は一つの試みですが、将来的に、そういう勉強会の記録を何らかの形でインターネットに載せたりして、広く日本学研究者に提供することができないかと思っています。あるいは、まずはレビューのようなものからスタートして、こういう資料にこういうものが書いてある、というような文献紹介をこれから日文研でできるように何とか新しい制度を整備したいです。今すぐではなくても、将来的にそういうことは考えられるのではないかと思っています。

以上、考えを述べました。  
松田 ありがとうございます。

コレクション関係については、一つのコレクションに一つの教員がおそらく語り尽くせないものを持っていると思います。例えば、日中図書については劉先生にお話しいただいたら、たぶんいろいろ聞けると思うんですが、時間の関係もありますので、代表ということで今の数名の先生にお話しいただきました。

出版の話のほうにそろそろ移ろうかなと思うんですが、クレインス先生が日文研との出会いになった、一つのきっかけである *Japan Review* について、ブリン先生がお話しくださることになっていますが、とりあえずは出版委員長に敬意を表して、末木先生のほうからまずはお話いただこうと思います。全般的な状況について、思うところとか、端で見ていて随分苦労されているようですので、思いのたけをどうぞ。

末木 苦労していることをわかっていただけて、どうもありがとうございます。

大体、日文研は年寄りをこき使い過ぎ。年寄りも結構元気な方が多くて。次期所長にはぜひ、六〇過ぎぐらいになったらもう一切役職につけないとかいうことをやっていただきたいと希望します。

日文研はいいとこだよとか言われて何も知らないで来て、一年目、サボって、出版委員会も二回ぐらいいしか出なかったんですね。それで、様子も全然わからなかったら、いきなり、委員長をやれとか言われて、日文研の出版物は何が何だかよくわからなくて。

実際、正直言って、ここに来るまであまり日文研の出版物って、利用してなかったですね。山折さんの昔の、「日文研叢書」で出したのとか、一、二点ぐらいいしか使ったこともなくて。こちらへ来たたら、研究室に出版物がどんどん来て、どんどんたまっていくな。ろくに見ないで、いずれはゴミになるわけで、もったいないなあというのが、正直なところであります。

ちょうど早川先生が電子化を進めるというので、私はあんまり、電子化とか、新しいのは正直言って好きではない、アナログ人間ですね。井上さんほどではないんですが、極めてそちらにシンパシーを感じる人間です。ですが、これに関しては、ともかく増えるのは嫌ですから、確かになるべく電子化して、もう何も手元ないほうがいいです。そういう時代はもう目に見えています。

いろんな研究所とか大学とか、そういう方向に進めています。どこが先にやるかみたいな問題で。この電子化の問題というのは、また後で早川さんのほうからきくとお話があると思います。

ただ、最初にやると、どうせ苦労しなきゃならないから、ほかのところをやった後でやるほうが得だろうと思うんですけど、早川先生たちが張り切って進めておられるので私も電子出版

派に乗っかるような方向になりました。ただ、これはまだ途中過程でありまして、これからどうなっていくのかわかりませんし、逆に、その過程でいろいろな出版物の問題点みたいなものが出てきたということもあります。おそらくこれがある程度軌道に乗るまでの間で、出版をどういうふうにしていったらいいのかということも、だいぶ変わるだろうと思います。ですから、全く途中状況で、これからどうなっていくのかわからないという感じはしております。

出版物もまた全部出版委員会で扱うのかというと、そうではなくて、広報関係のものもありますし、またシンポジウムなどのものに関しては研究協力委員会のものとかということで、そういう扱いがまた複雑になっていると思います。これもおそらく電子化などを通して、もう少し交通整理がなされなければならないだろうと思います。

そういう中で、確かにプラス方向に動いているような問題もあります。例えばこれはこの後ブリーンスさんのほうから *Japan Review* のことをお話しになられると思いますし、またフィスターさんのほうから、いわゆるモノグラフのことなどもお話が出ると思います。例えばモノグラフであれば、商業出版社から出版されるようなものが出てきましたし、また日本語の出版物に関しても、「日文研叢書」の商業出版化というふうな方向も進められてきております。そういうものの中には注目を浴びるようなものもぼつぼつ出てきております。まだ完全に順調に行っているというわけではなくて、これからいろいろ検討すべき課題というのは多いながらも、プラス方向が少しずつ出ているのかなという感じはしております。

そんなことで、あんまり大した話ができなくて申しわけありませんが、その後はブリーンスさんとかフィスターさんから、具体的なことをお話しただけだと思います。

松田 ありがとうございます。

グリーン先生、ごめんなさい。今、電子化の話が出たので、むしろ逆の立場というか、先頭に立って引っ張ってこられた宇野先生あたりに、ちょっとお考えをお聞きしたいというところもあるんですけど。

**宇野** きょう一番おもしろかったのは白幡先生の資料で、最初の段階からどういうふうに資料を集成するか、それからデータベースをどういうふうにつけていくかという、この二本柱が計画されて、着実に今まで続けられてきたということでもあります。

私が日文研に赴任したのは一九九九年、大体二五年の折り返し地点くらいです。初期を支えられた、非常に活躍された先生方が、十数年の間に、草創期の目標をもとにいろんな蓄積が作られていた頃です。その頃、私が外から見た日文研というのを少しお話しして、それからその電子化というところへまいりたいと思います。

その頃、私なんか外から見ると、日文研と例えば京都大学人文研などが非常に対照的な研究組織に見えました。旧来の学問のジャンルから言うと、歴史の古い人文研は、図書資料などはるかに充実したものを持っていました。ただ、外から見ると、日文研のほうがはるかに魅力的であり、手前みそかもしれないですけど、個性的な活動をしているように見えました。それから、情報とかデータベースに非常に積極的に取り組んでいて、一番大事なのは、学問の性質が全然違うというところにあります。

外から見て、いろんな先生が活躍されておられたのですが、例えば計量経済学、歴史人口学の速水融先生ですね。初めて数量化の理論を歴史に導入された先生だと思うんですけど、江戸時代の宗門改帳に基づいた非常にすばらしいデータベースを作られている。今から見ても、あのレベルのものを作るのは非常に難しいというデータベースを作られておられます。

そのほかにも非常に個性的な研究の方が多くて、埴原和郎先生は形質人類学、それから尾本恵市先生はDNA学。今はDNAなんてちっとも珍らしくないんですけど、その頃は文系の機関にDNAの分析装置があるなんて考えられないようなことであって、そのお二人が自然科学的な手法に基づいて日本列島多民族論を相互に刺激し合いながら展開をされていました。安田先生もものすごい装置を備えて環境研究をされておられて、赤澤威先生も、やはりDNAに関心を持たれて、ネアンデルタール人とクロマニヨン人の関係をDNAから考えておられました。平たく言うと、クロマニヨン人とネアンデルタール人のDNAが一致をしたかどうかというような、そういうふうなことを楽しくやっておられて、私にとっては非常に魅力的な研究が多かったということがあります。

めぐり合わせでもって、日文研に赴任して一番感心したというか、驚いたことは、大学ではちょっと考えられないほど、情報課が充実したスタッフと設備を持っているということでした。また、これも考えられないことなんですけれど、GIS（地理情報システム）という、非常に高価な機器が何とありました。これは使わないといけないということで、その共同研究を始めて私は今に至っております。GISを研究の基礎として、通常の伝統的な方法ではできない研究をGISを使ってやっていこうということを進められたのは、ひとえに赴任したおかげであるということでありませう。

それから、何と、資料電子化予算というのがあって、持っているアナログデータを日文研の予算で電子化していただきました。これは本当に助かると思いますか、今や手元にアナログデータは全くなくなってしまう状態になるまで電子化をしていただけました。それで、公開データベースがどんどんと充実されていくことが、私が赴任した頃の日文研の大きな特色の一



つでありました。

それから現在に至りますと、教員のスタッフ構成は少しは変わっているんですが、今、日文研の記録を全部、事務的なものから研究成果まで、すべて電子化をしてデータベースとしていき、出版も電子化をする、ホームページも刷新する、ペーパーレスも進めるといように、やはり日本の中では最先端のことをしています。これはひとえに、初め、日文研を創設したときの構想の延長線上にあるおかげだと考えております。

先ほど私がおもしろかったのは、光田先生がCD-ROMだと発展途上国では困るということとです。今は完全に逆になりました、情報格差というんじゃないに、情報ネットワークを使ってくれたら、どんなところでも情報を見ることができるといような時代になっています。おそらく日文研の成果は、すべて電子情報として世界に発信していくことが目前のこととなってきていると考えております。

ただ、私自身はやはりまだ電子化の課題というものがあると思います。私が日文研に赴任した頃の初期の先生方は、情報であるとか、そのための技術を人文的な研究と組み合わせ、非常に個性的な研究をなさっておられました。電子化、情報化というものは、でき上がったあるものを電子的に加工して発信するものではありません。それは一つの役割ですが、電子化する中で、今までになかった方法論を開発して、新しい研究をつくっていくことに電子化の一番の意味があり、それを発展させていく一助、お手伝いができればうれいというふうに思っております。以上です。

**松田** ありがとうございます。

末木先生、宇野先生というちょっと対照的な立場のお二人とも入れることができて、座談会

をした意味がそれだけでもあったというように思います。

「ちょっとお待たせしていただくんですけども、具体的な出版物の話に行きたいと思います。ブリン先生、よろしく願います。

ブリン ありがとうございます。私が日文研に着任したのは、ほぼ三年前になりますけど、日文研での業務は *Japan Review* という超一流の学術雑誌の編集の仕事なんです。僕は編集の資格を持っているわけじゃなくて、編集の経験は過去に結構あるんですけど、日本史研究をやっている傍ら、この雑誌の編集を試行錯誤的にやってきた、そういう感じですよ。

きょうは *Japan Review* の過去について、二、三、私が気づいたこと、また私が編集長として *Japan Review* の将来について、私が抱えている *Japan Review* の将来像というようなものについて若干話をし、それから最後に、*Japan Review* が今現在直面している問題を二、三、ごく簡単に触れさせていただきたいと思います。

*Japan Review* という学術雑誌は、一九九〇年に創刊を見ました。今年七月に二三号を刊行するわけなんですけど、相当長い、さまざまな紆余曲折を経た歴史を持つ学術雑誌です。振り返ってみたときに大きな節目が、大きな画期と言っていると思うんですけど、それが二つあったように思います。

その一つは、二〇〇〇年、ちょうど鈴木先生が編集長をやっておられた年ですが、一二号が一つの画期をなす。当時は今と違って、所内の教員が持ち回りの二年任期で編集をやっていたわけですけど、その一二号で何が画期的かと言えば、一二号に載った論文は、そのすべてが日本と関係を持つ論文であった。つまり、どういうことかと言えば、それまでの *Japan Review* は、二、三の例外を除いて、日本と全く関係のない論文を掲載していました。例えば中近東の

人類学の研究とか、中国の植物学研究、医学研究、トルコ・シリアの研究、ベトナムの研究などが *Japan Review* に載っていました。

その後、実は一回だけ、私に言わせれば「逆戻り」というのがありまして、先史時代の北ユーラシア大陸の研究が載ったんですけど、一応二〇〇〇年という年を迎えて、*Japan Review* の性格づけがかなり大きく、抜本的に変わったというような見方ができるのではないかと思えます。つまり、「アジアレビュー」といいますか、「日文研レビュー」が *Japan Review* になってしまった。そういうような性格づけ、そういうように生まれ変わったのではないか、と言えると思います。

今言いましたのは、トルコ・シリアの研究の質をどうのこうの言っているわけでは決してありません。ただ、日本研究をやっている我々が、*Japan Review* を正直言ってあまり読まなかった、あるいは親しみを持たなかった、なじみを持たなかった理由は、そこにあったのかもしれない。今、クレインズ先生のお話で、*Japan Review* が日文研との出会いのきっかけであったとおっしゃって、またそれを讀まれて日文研が日本学の総本山みたいな存在だと分かったとおっしゃられたのを聞いて、僕はすごくおもしろいと思っているんですけど、むしろ例外的な経験であったと思います。

第二の画期としては、二〇〇四年に刊行された *Japan Review* の一六号であったと私は思いません。この一六号は、私の大先輩に当たるジェームズ・バクスター教授が編集長を務めていた頃のもので、当時はそれまでの持ち回りの二年任期の編集体制をやめまして、編集専門の、しかも母国語が英語の編集長を採用して編集の仕事に当たらせる、という新しい体制が既に導入されていたわけです。

一六号のどこがおもしろいかと言えば、日文研の「紀要」的な性格を *Japan Review* が脱皮した、そういうような見方が成り立つのではないかと思えます。それは一六号に載りました募集要項を見れば、よくわかると思えます。

英語で読みますが、「*Japan Review* is open to all authors. On occasion, the Editors may invite contributions.」云々とありますが、「*Japan Review* is open to all authors.」とらう文言が肝心なのです。それまでの募集要項を見てみると「*Japan Review* is open to … research staff, joint researchers.」つまり共同研究会のメンバーですよね。その後「administrative advisors」とありますが、それは果たして何を指して言っているのか、よくわかりません。

一五号までの *Japan Review* は明らかに所内の教員によって作られ、教員のためにある雑誌、そういう性格づけ、色合が非常に強かったです。一六号はそういった意味では、紀要から、「*Monumenta Nipponica*」とか「*Journal of Japanese Studies*」などのような一流の学術雑誌と肩を並べるような性格のものに初めて生まれ変わった、そういう評価ができると思っています。

ただ、おもしろいことに、そこにはまだ何も査読について書いてないので、僕がかかわった二〇〇九年の二一号に初めて「査読をかけます」という文言を募集要項に入れたんですけど、*Japan Review* でいつ頃から査読を導入したのかについて、僕はまだはっきりわからないので、今日いらっしゃる先生方にぜひ後でおたずねしたいと思えます。

この紀要的な性格から学術雑誌的な性格へと移行したことを、僕としてはものすごく肯定的に評価したいんですけど、肯定的にばっかり評価できないところもあると思えます。それはどういうことかと言えば、この日文研の所内の専任の先生たちがほとんど *Japan Review* に投稿してくれなくなっちゃったという事実があるからです。もちろん名指しはしませんが、今調べて

みたら、大体三〇人の専任教員がいますが、そのうちの二四人は、論文をまだ投稿したことがありません。編集長の私としては、ぜひぜひ投稿していただきたい。それは教員だけではなくて、外国人研究員もそうなんですけど、どんどん *Japan Review* に論文を寄稿していただくように、ぜひお願いしたいと思います。学術雑誌なので、査読に回します。査読に回すと却下され、修正を依頼されることもありますけど、ぜひとも投稿していただきたいと思っています。

あとは、*Japan Review* の過去については、二、三、ごく簡単にちょっと気づいたことを申し上げますと、これもまた「鈴木政権」、鈴木先生が編集長になるところでまた変わったことな感じですけど、それまではフランス語とかドイツ語の論文も載っていました。あとは、論文とか研究ノートのほかに、lectures, team research projects, notes, discussions という範疇のものまで *Japan Review* に載っていました。これは制度的にそれを掲載させたわけじゃなくて、何か思いつきの感じがあって、どれも長続きはしませんでした。それもまた、鈴木先生のとくにだいぶ整理されて、今、論文と研究ノートのみになっています。

これから、*Japan Review* の将来について今考えていることを二、三、話をさせていただきたいんですけど、過去には画期的な節目が二つあったんですけど、僕なんかは全然画期的なことをやろうとは思っていません。

僕の先輩に当たる編集長の方たちが残した実績というか、それを踏襲して若干の軌道修正を行って、新たな方向に、*Japan Review* を引っ張っていきたいと思うんですけど、まず特集をやりたいと思っています。今考えているのは、まだ何も決まってはいませんけど、別冊として特集号を、毎年ではないにしても、定期的に出したいと思っています。

過去には、実は、四号、八号、一二号、一四号と特集を組んでいたもので、これは決して新た

な展開ではなくて、ただ別冊というのが新しいと。実際に今、陰陽道の特集をやらないうちが申し入れがあって、それについて編集委員会の者と相談しているところだ。

もう一つ今考えていることは、書評欄を毎号に設けることです。れっきとした学術雑誌、欧米の学術雑誌は、やっぱり書評がないと様になっていないんですよ。Japan Review は、世界のすぐれた日本研究に常に目を配っているというか、目を向けていないとだめだと思うので。これから、二四号から書評欄を設けたいと思っています。それも書評を載せるということは、推薦するというわけではなくて、分析的な、批判的な書評にしたいと思っています。

最後に、もっと積極的にJapan Review の宣伝をしたいと思っています。過去にはもちろん宣伝はやっています。僕の先輩のジェームズ・バクスター先生は、例えばJapan Review が刊行されると、目次まではH-Japan に流してはいるんですけど、僕はもっと積極的にできるところもあるんじゃないかと思って。第一は、名刺がわりにJapan Review を配ること。あとは、学会へ行くたびに、事前にJapan Review を送ってもらう。私が行っている学会に事前に、出版編集室の白石さんに送ってもらうので、海外の学会でJapan Review を配っています。今考えているのは、来年度のAASで、Japan Review だけではありませんけど、日文研の出版物の展示みたいな、ブースみたいなものを設けたらどうかな、というような話をしているところです。最後に、Japan Review が今直面している課題といえますか問題を二、三、取り上げてみたいと思います。

特に出版関係では、継続性がものすごく大事のように思います。編集長が二年交代じゃなく、そういう編集体制じゃなくて、一人に、僕の場合なんか一〇年近くいさせてもらうかもしませんが、継続性がものすごく大事なので。編集長もそうなんですけど、編集委員会の交

代もなるべく少なくして、なるべく同じ人材でもっていききたいと思えます。同じように、事務のスタッフも、実にすぐれた才能のある編集のスタッフが今、日文研で仕事をしているわけですが、それもまた、三年交代で手放さなきゃいけないようになるというのは、非常に遺憾のように思えます。意見として、ちょっと言わせていただきたいと思います。

あとは全く別の範疇のものとして、*Japan Review* の特徴、*Japan Review* は学際的な雑誌なので、ただ、一つの特徴としては、図版をたくさん載せることができる。フルカラーで、図版、画像をいっぱい載せる。これから僕もどんどん美術史とか、そればかりではないんですけど、図版をたっぷり *Japan Review* にもっていきたいと思ってはいるんですけど、そこにはいろんな予算の問題もからむので、ここでは細かい話はしませんけど、*Japan Review* の特徴の一つでもある図版、画像をたくさん載せるという、それを持続できるように、それだけの予算をやっぱり組まなければならぬと思います。

ほかにも言いたいことはたくさんありますけど、長くなってしまったので、この辺でお願いしますと思います。以上です。

松田 ありがとうございます。

確かに *Japan Review*、それから『日本研究』もそうですが、紀要ではないのだ、世界中の日本研究者に開かれていて、ちゃんとレフリーもつく学術雑誌なのだという、そういう改革が目指されてきて、それが実現されつつあるということ、確かにそうだなと思いきこしました。二五年史に残しておいてよい事実だと思います。私も *Japan Review* に投稿していない二四人の教員の一人なので、あまり訳知り顔で語るのには許されなと思います。

それでは、フィスター先生に次の話をお願いしたいと思います。英文モノグラフを作るとき

には随分お世話になりました。いろいろ大変なお仕事、いつも感謝しております。  
 フィスター ありがとうございます。

和文の出版物に関しては後でいろいろと話が出ると思いますが、日文研モノグラフシリーズについて、簡単に申し上げます。

スタートは一九九八年で、第一集は山田慶兒先生の「The Origins of Acupuncture, Moxibustion, and Decoction」でした。河合隼雄先生が所長をされていた時期だったと思います。日本語を読めない研究者にも日文研専任の先生たちの立派な研究成果を普及するために、特別の予算をいただいで、以来、年に一〜二冊を出しています。

私が編集長になったのは二〇〇二年です。先生たちが忙しいこともあり、当時は募集としても、原稿はなかなか集まりませんでした。そこで、いろいろな先生に相談してみたところ、内容は良いのだけれど、本の装丁があまり魅力的ではなく、海外向けとしては部数も少なすぎるという意見がありました。部数は一〇〇〇部と決まっていますが、とりあえずもう少し立派な本を作りたいと思い、二〇〇六年に刊行した鈴木貞美先生の「The Concept of "Literature" in Japan」以降はハードカバーにしています。

現在までに、海外の出版社と共同で二冊を出しています。山田奨治先生の「Shots in the Dark」をシカゴ大学出版局 (University of Chicago Press) と、そして、最近では磯前順一先生の「Japanese Mythology」を英国の Equinox 出版社と共同出版しました。難しい面もあるとは思いますが、今後もできるだけ海外の出版社との共同出版を進め、モノグラフシリーズを世界へ広く普及させていければと思っています。

松田 ありがとうございます。



出版部門というのは、考えてみれば昔は管理部の隅でやっていたものが、今では大きな部屋でやっていて、本当に日文研の事業の柱になっているわけですけども、そういった機構の改編とか、あるいはお二人が語られなかった日本語の刊行物なんかについても、ちょっと証言をいただければと思うんですけども、どなたでも。出版関係で補足していただけると。

**白幡** 教員の皆さんは、それぞれ出版物については関心も強く思い入れも深いと思うんです。出版は大事だ、しかしなぜ大事なのか。創設当初の議論では、研究所であるからには、行われた研究の外部発信が絶対必要であると。この一年何をやってきたのが問われるから成果を示す必要がある、だから出版物に力を入れるんだという考えが強くありました。名前も存在もほとんど知られていない組織ですから、メンバーの発信こそが大事だった。

なので、初期の考えは、メンバーがどんどん書け、どんどん発信しよう、で、それは内に閉ざされていたからではなく、ここで行われているのか世間に知られていないわけで、成果発信のために紀要にもどんどん書け、内部が頑張ってるのか世間に知られていないわけで、内部のいい研究をどんどん発信していくためにメンバーへのしぼりはできるだけ緩くして、紀要的な雑誌を日本語、英語、そしてどんどん商業出版も出そうという感じだったですね。出版に関しては、最初の五年、一〇年は、性格が違っていたし、違っていて当然だと思います。

きょう話題になっている、資料と情報、それから出版、なんでそんな部門が要るのかを考えると、おく必要がある。研究所ですから、本来、研究をやって、いい成果を上げるといのが目標です。使うお金は研究のため。そのためには、文系として、余計に資料部分は豊かになければいけない。それから旅費を含む研究費も必要だ。次に、出版を含めて、あるいは情報機器を使った成果発信も必要だ。一体どれぐらいの配分が適当なのか、どれぐらい要求してお金をも

らえるのか、どれぐらい自分たちの研究時間を割いて発信に使っているのか、いずれも十分な議論が必要です。この二五年間の配分とは違う配分の仕方が今後は必要かもしれないと思っています。

最近、社会貢献、社会貢献と言われていて、どれぐらい外向けに発信すべきかの物差しをつくろう、という動きがありますね。以前だと、例えば新聞記事にどれぐらい登場しているとか、テレビに出ているかとか、商業出版でどれぐらい本を出しているかとか、若干の物差しがあった。しかし必ずしもルール化されておらず、社会に向けての発信は重要だという程度だった。

その中で我々が考えるべきなのは、出版という形で、紙媒体の出版、それからもっと違う新しい情報機器での発信、どれぐらいの割合がいいのかのだろうか。そう簡単に答えは出ないと思いますね。いろいろ現スタッフの中で議論していかなければならないと思います。

明後日ここで地球研との合同シンポをやるんですが、総合地球環境学研究所、あそこ、名前は研究所なんです。日文研は国際日本文化研究センターなんです。この違いは何か。センターというのは、研究だけやっているんじゃないくて、別の業務もある。研究所にすると、それは研究を中心にとやる場所だと。センターとは、やはり研究以外に、例えば他の研究者の支援だとか、発信だとか、その他もろもろをサポートするような業務もしなければいけない、業務が発生する。それで、初期の日文研構想の時代、梅棹忠夫さんなんかは、「絶対、センターでなければいけない。研究所にしたら、研究者というのは研究しかやらん。人のお世話なんか絶対せん」と。日文研は国費で建てて、なんで国民の税金を使うかというところ、日本の文化を、あるいは日本を世界に知ってもらう、そして豊かな交流をするんだと。個々人の研究の成果を上

げることだけに血道を上げるようになってもらったら困るから、センター。で、結局、梅棹さんだけの意見ではないんですけども、そういうことでセンターになったわけですね。だから、センターというのは外部への発信を考える、それから海外の研究者を支援する、育てる、協力する活動を一生懸命やろうということが義務づけられているわけです。

地球研は何で研究所になったのか。私は、総合地球環境学研究所センターになるべきだと思っているんですけど、なぜか名称は研究所になっちゃった。背景として、一つには例えば、理系のほうの研究は実用性の観点から信頼されている。文系はそういう点であまり信用されていないくて、研究だけという、ほんとに興味的なものに向かい、自分の関心のあるところだけやる。そういうことがないようにということで、研究センターにされた。

私は研究所になれればいいなあというふうに密かに思うものですが、やっぱりどうしてもやらなければいけない仕事はある。だから、発信の部分での、例えば出版のあり方、それから情報を持ち方と外へ向けての発信の仕方、その辺を考えて、日文研の任務から考えると、どれぐらいが適当か、どういうことが正しいか、許されるか考えておかなくてはいけないと思うんですね。そうすると、紀要、雑誌の性格とか、紙媒体と電子発信の割合とか、そういう答えも、そこから出てくるのではと思っています。

**松田** ありがとうございます。

瀧井さん、フロアから質問はとるんですか。じゃあ、ちょっと時間も押してきてしまっているんですけども、フロアのほうからご発言あれば、お願いします。

どうぞ、お願いします。

**井上** 私は、ここでよく、京都大学人文科学研究所の風を吹かせたと思います。きょうも

ちょっと黙りがたかったので、同じいやらしい風を吹かさせてください。

私の先生だった吉田光邦さんという人が、ある研究会を二週間おきにやっていました。そこでは毎回、外書を読んでいた。全員がなんらかの外書を充てられて、ここで言う外書ですよ。当時は外書と呼んでいませんでしたが、外書に当たるものを読んでいました。ことお金の規模は全然違いますが、人文研も外書を集めていました。研究報告の中にも、外書を利用した研究報告、あるいはジョン・マレーの日本ガイドブック、あるいはイギリスやフランスの雑誌・新聞、万国博覧会で開かれた日本に関する情報。韓国や中国、アジアには、当時目がまだ向いていなかったですが、ヨーロッパで受け取られた一九世紀の日本像に関する外書を中心とした共同研究のようなことをやっていました。園田さんもその中にいました。私もその中にいました。白幡さんもその中にいました。

結局、そこを母体にして、そこが母体になったから、外書を収集しようということになったんですね。人文研には気の毒だけれども、予算の規模が全然違う。人文研の吉田光邦研究会で始まったアイデアを私たちはくすねとって、札幌で大きく膨らましてしまったという側面は、否応なしにあると思います。にもかかわらず、この国際日本文化研究センターでは、それをめぐる共同研究はあまり、やられてこなかった。そうね、細々とは、あったかな……。クレインスさん、頑張ってください。僕はもう一度あれがよみがえるような、そういう研究所であってほしいなと思っています。

あと一点、図書館のことについて語らせていただきます。よく、この図書館が、英国の、イギリスのある図書館を手本にしているというふうに言われます。マスコミでもよくそう伝えられています。これは間違いです。あんなものは手本にしていません。ここが手本にしたの

は、アスブルンドという建築家の、僕、もうそういう勉強をしなくなつて、三〇年ぐらいになるんやけど、アスブルンドという建築家のストックホルムに建てた図書館が手本です。内井昭蔵さんも言うてくれました。「みんな、英国英国言うてるけれども、君だけですね、わかってくれるのは」、つて。いやらしい話やね、自慢たらしくて。いやらしい話やけれども、これも二五年史の記録にというのでとどめておいてください。

ついでに言うと、今度、ヨーテボリ大学との合同の催しがあるらしいので、ぜひその図書館を見に行つて、ああ、うちの図書館はストックホルムなんだなど。それを確かめておいてただければうれいかなと思つています。

以上です。すいません。

**松田** ありがとうございます。まさに歴史の証言という感じですが。

ほかにいかがでしょうか。

リュッターマン 色豊かなお話、本当に興味深く伺いました。何よりもありがたいのは、証言とともに資料をいただくことで、お土産をいただいて。ほほえましいと思つたのは、当時はそういう資料委員会でさえ午後五時から開いていたというところで、ああ、そうだな、これも時代かもしれないと思ひました。また、あまりほほえましくないと思つたのは、ノートに使つたのが国立民族学博物館という、京都だけじゃなくて大阪からも随分と風が吹いてきたなあというところですね。

最後にお伺いしたいのですけれども、白幡さんの矢印につえ、白幡のしたづき(?)のようなものがある、字(G?)に見えるんですけれども、それもまた外書を意味しているんですか。いかがですか。(原資料では「白幡『氏』」を「G」と見まちがえられたのでしょうか。(松

田) 漢字の「氏」です。(白幡)

白幡 外像と今は言っていますけれども、外国人から見た日本イメージ全般、とにかくビジュアル情報を全部集めたいという、そういうレポートを私が出したんですね。そのことです。

それから、民博の用紙が用いられているとの指摘ですが、これは誤解なきように。国立民族学博物館というのは、私は所属しなかったですが、園田さんは一年間、民博の助教として日文研創設のために動いたんですね。創設準備のためのいろんな機能が、民博に置かれたのです。民博ができるときの創設準備機能は、国文学研究資料館に置かれたのです。既にある組織の中に次の組織のための卵となるような、そういう事務体制ができるんですね。それで、準備室の備品をまだ使っていたということですよ。

松田 よろしいですか。ほかはいかがですか。

白幡 さっき井上さんが言った図書館設計の話はほぼ当たっているのですが、やっぱりロンドンの大英図書館のリーディングルーム形式のものをつくってくれと何人かの日文研メンバーが言っていたいきさつはありますね。

井上 建築家は、施主の依頼によくあっかんべえをするんですよ。表面的には受け入れて、心の中であっかんべえをする。内井さんも、聞き入れたふりはして、アスブルンドでおしきったんでしよう。

白幡 いやいや。図書館の外観は、外から見たらアスブルンドですが…。

井上 いや、中もそうです。

白幡 図書館の中の本の配置は、円形にしか置かないのではなくて、いろんな置き方の注文は、やっぱり日文研のメンバーがああしてくれと内井さんに言った。とはいえこんな風に、最

初に一緒にいたメンバーですら意見が違う。二五年史を書くの、難しいですね。

井上 建築の心得がある人は、ここへくるとみんな言いますよ。アスブルンドやね、って。

白幡 いや、内井さんはそうおっしゃっていましたよ。ただ、内部の図書、棚の配置とか、閲覧用座席の置き方とかこちらの希望を伝えました。図書館を一周するように、壁に本を並べてくれなどと、何人か、少なくとも私はそういうふうの内井さんに頼んだんですね。

井上 内井さんは、英国英国言うてはしゃいでいる人に、話をあわせはったと思います。そのうめあわせでもするつもりやったんかな。私には、アスブルンドの話をよくしたはりました。白幡 はい。

松田 モデルがいずれにあるのか、実物を見てみたい気がします。ほかはいかがでしょうか。

クレインス すみません、私からなんですけど。

松田 どうぞ。

クレインス きょうの内井上先生のコメントで初めてわかりましたけど、初期の頃はずっと園田先生が、もっと勉強会やりましょう、外書の勉強会やりましょうとか、よく言われて、奨励してくれましたので、また何かそういう形で考えたいと思います。

早川 よろしいか。

松田 はい、どうぞ。

早川 先ほど、ブリン先生が言われた *Japan Review* の転換期というのは、そのとおりだと思います。といいますのは、*Japan Review* だけじゃなくて『日本研究』も、初期は白幡さんが言われたように、ここで研究とか活動した成果は、抱え込むじゃなくて発信して、外に知ってもらわなきゃだめ。そのためには商業出版も積極的に、それからいろんなタイプのものを、早

く出していくということでした。そして、ちょうど一〇周年のとき、スタンフォード大学のベフ先生が見えて、そろそろ日本語の『日本研究』も英文の *Japan Review* も、国際的な日本研究の学術的なものにしてほしい。アメリカにもヨーロッパにも日本学会がありますし、そういうところと組んで、国際的な日本研究の学術誌にしてほしい、その旗振りというか、中心に日文研がなってほしいと言われたのをよく覚えています。

そのとき、園田さんたちと議論したのが、そうした国際的な日本研究の学術誌を出してゆくには、先ほどブリンさんが言われたように、編集長も含めて、ある時期、スタッフがずっと恒常性を持って見渡している必要がある。そういうスタッフのいろいろなノウハウを蓄積してゆく必要がある。しかしあの時代にまだできなかった。一〇年目のときにはたしか状況的にそれはまだ難しかった。

本格的な出版というのは、事務所の片隅で出来るものではないのですね。ちゃんと出版室みたいなものを設けて、出版専門のスタッフを抱えてやらないといひ出版はできない。

これも鈴木さん、園田さんたちが、出版物をいいものにするには、その担当が二〜三年で交代していくような体制では無理で、恒常的に優秀なスタッフを育てていかなきゃならないと考えるようになり、そのきっかけが、ベフ先生が講演で言われたちょうど一〇周年のとき。あの頃からを境にして、鈴木さんが本格的なものにしなきゃだめだということで、査読を付けたら、デザインを工夫するようになった。

実は *Japan Review* は一〇号まで、ものすごくデザインに凝ったんです。一〇号までの表紙デザインは一流のカメラマンの珍しい写真を使ってやっただけです。ただもう一つ流れとして、大学とか研究所の紀要は、ハードカバーとか、デザインに凝ったりするのは止めて、中身が勝負



だという考えが出て来て、一一号からは、非常にさっぱりしたものに変わっています。そして今、ブリン先生が一号一号考えて表現を工夫しておられます。それもいいことだと思いません。

松田 ありがとうございます。

ちなみに、手元にある日文研二五年史の原稿では、*Japan Review* も『日本研究』も「紀要」というふうに書かれていて、ここはちょっと、どういうふうに書いたらいいのか、考える必要があるかなという感じです。

そろそろ時間もいっぱいになりましたので、マイクを司会の瀧井先生にお返しして、締めていただきたいと思えます。

瀧井 長時間、興味深い話をありがとうございます。

四回にわたって続けてきた二五年史の座談会、ひとまずこれで締めということになります。急病とか海外出張とかで参加していただけなかった先生方、残念ながら若干名おられましたけれども、新旧取りまぜて、非常に多角的に興味深いお話がこの間聞けて、二五年史の編纂事業にも大きな弾みになったのではないかと思っております。きょうはどうもありがとうございます。

パネリスト

宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授）

フレデリック・クレインス（国際日本文化研究センター准教授）

白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）

末本文美士（国際日本文化研究センター教授）

早川聞多（国際日本文化研究センター教授）

パトリシア・フィスター（国際日本文化研究センター教授）

ジョン・ブリーン（国際日本文化研究センター教授）

光田和伸（国際日本文化研究センター准教授）

司会

松田利彦（国際日本文化研究センター准教授）

フロアーからの発言者

井上章一（国際日本文化研究センター教授）

マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター准教授）



